

## 名物教師

2022. 1. 31

「名物教師」という言葉がある。いやあった。ここのところさっぱり聞かなくなったように思う。だいぶ古い話だが、私の高校時代のことである。名物教師とも言える先生がいた。それも一人二人ではなかった。皆さん、それぞれに個性的な方々だった。

現代は、個性尊重とか個性の時代などと言われる。その割には、個性的な人物が、どんどん減っているように思うのはどうしてだろうか。昔の方が、よっぽど個性的である。学校の先生も、そうだった。

いつも自分の自慢話ばかりして、半年ぐらい『山月記』の授業をしていた国語の先生がいた。生徒は、毎回のように同じ話を聞かされる。授業が進むわけがない。生徒から質問されると、その場では答えず、必ず次の時間に答える数学の先生がいた。辛そうだった。授業中に尾瀬の話をする生物の先生がいた。後で知ったのだが、その先生は尾瀬の研究者だった。本も出していた。いつも白衣を着て教室にやってくる、むずかしいことをむずかしく説明する物理の先生がいた。その先生のテストではクラスの平均点が10点だった。教科書の大事なところに「はい、がちり赤線」と言って線を引かせる地理の先生がいた。線を引いた内容よりも「がちり赤線」が耳に残った。体育の時間に、チームごとに競わせて、最下位になると歌を歌わせる先生がいた。実は、指導者として甲子園に行ったことがある野球部の監督だった。

これらの個性的な名物先生に共通したことがある。時折見せる、きらりと光る専門性である。「この先生、実はすごいんだ」と思わせるものがあつた。番外編もある。ソフトテニス部（軟式テニス部）の顧問の先生である。大会の引率をしていただいた。服装はジャージなのだが、足元が黒い。革靴である。テニスシューズでなければ、テニスコートには入れない。すなわち監督としてベンチに入ることができない。さてどうしたか。1年生のシューズを借りて何事もなかったかのようにベンチに座っていた。応援をしているその1年生の足元は黒かった。かわいそうだった。

灘高校と言え、言わずと知れた超進学校である。灘校は、最初から今のような高校であったわけではない。そこには「伝説の灘校国語教師 エチ先生」の存在があつた。橋本武先生である。エチオピアの皇太子に似ているという理由から、生徒がエチ先生と呼ぶようになった。

エチ先生の授業では、教科書を使わない。3年間同じテキストを使う。それが中勘助の『銀の匙』である。夏目漱石が激賞したほど日本語が美しい作品である。エチ先生の授業の真骨頂は、横道にそれることである。

そう言えば、昔の先生は、よく横道にそれていた。横道にそれたきり帰ってこない先生もいた。それでも許されたというか、どの名物先生にも、何か憎めない人間らしさがあつた。結局、勉強というものは、自分でやっていたのである。

個性の時代とは言っておきながら、何だか窮屈な世の中である。益々、名物教師は出にくくなっていくだろう。昔が懐かしい。